

追悼

フリーダ・ヘン女史

磯部 琇 三*

西ドイツ・ハイデルベルグの Astronomisches Rechen Institut (天文計算局) の図書室長の Frieda Henn (フリーダ・ヘン) 女史がさる 6 月 4 日に 61 才で亡くなられた。

ヘン女史はこの研究所がベルリンにあった頃から 28 年もの間勤めておられた。その間、司書として本の整理ばかりでなく、天文学研究者には欠かせない Jahres Bericht (天文関係の論文の目録を各年ごとにまとめた本) の編集に携わっていた。この Jahres Bericht が 3~4 年おくれで出版されていたが天文学の急速な発展に伴いより迅速に論文目録が出版される事が望まれ、所長のフリッケ氏の指導のもとにヘン女史を中心に論文を整理するシステムを合理化して、1968 年より現在の Astronomy And Astrophysics Abstracts (略して 4A と呼ぶ) が半年程度のおくれで出版されるようになった。ヘン女史は終始この仕事の中心で、各国から送られてきた論文を見て所内の研究者のだれに Abstract (主に、原著者の Abstract を縮める方法) を作ってもらうかを決め、毎週一回開かれる集いの時に手渡し、返されたものを 4 人のタイプ係のお嬢さんに渡して、毎週毎週 4A の原稿を重ねていっていた。又、国際的にも IAU のメンバーになり、Documentation (資料整理) の問題に重要な役割をはたしていた。

私はこの研究所に 1972~1974 年に滞在した。この頃はヘン女史は非常に元気でドイツ人らしく背筋をピンと伸ばして 170 cm 近くある大柄の体であちこちの部屋を動きまわっている姿には圧倒されたものである。歩く事が好きで研究所のリクレーションの時には若い者と一緒は何 km も歩いていた。ヘッペンハイムという隣町から

ハイデルベルグまでは列車に乗るが、駅から研究所まで 2 km 程を市電に乗らずに歩いておられた。一人身の気楽さか毎日遅くまで残っておられたのが印象的であった。

ドイツ人一般かどうか知らないが研究所では一般の所員は 8 時から 4 時の勤務時間がすむと残業等とても考えられないという風にさっさと帰ってしまうが、所長のフリッケ氏やヘン女史等責任ある地位にいる人ほど日本人並に遅くまで仕事をしていたように思う。

28 年も同じ図書室におられたからいろいろの本のありかをよく知っておられて、滞在中は何度も助けてもらった。そればかりでなく論文の中身もよく見ておられたようで、“Morimoto の論文にあなたの撮ったオリオン星雲の写真が出ていた。” 等と教えられて驚いたりした。

つい二年前まであんなに元気だったヘン女史が亡くなられたと聞いて、信じられない気持ちである。一般に天文学ではヘンリー・ドレーパー・カタログを作ったキャンロン女史等根のいる仕事において女性が能力を発揮する機会が多い。そんな意味で 4A を順調に出版出来るように体制作りをしたヘン女史の功績は大きかったと思うと同時に、この時機にまだそれほどの歳でないヘン女史を失った事を非常に残念に思う。どんな分野でもどんな重要な人でもいなくなった後には必ず代りになる人が出てくるものである。数年後にはヘン女史を失った痛手は回復されるであろう。しかし、その痛手の程度を回復するのに費されたプランクの期間で評価するならば、ヘン女史を失った事は大きい。

心からヘン女史の冥福を祈りたい。

* 東京天文台 S. Isobe

天文学におけるグラフィックディスプレイの利用

天文学における計算機の導入は星の進化や銀河系の渦状構造の問題等において飛躍的な進歩をもたらした。しかし、観測データの整約においては数々の制約があり、有効ではあるが補助的な意味を持つのみであった。例えば一枚のプレート上にある情報量は少くみつもっても百万以上もある。近年、イメージ・ダイオードという高速読み取り素子が出来、それを数メガバイトの記憶量を持つ計算機で処理出来るようになってきた。その場合、データの多様性のために単純なプログラムでは処理しきれない場合が多く、人間の目の介入が処理を飛躍的にやさしくする。このような目的のためには人間と計算機が対話できるグラフィック・ディスプレイを使うのが非常に

有効である。

東京天文台には 1976 年 1 月より FACOM 230-58 が導入され、それにストレージ・タイプのグラフィック・ディスプレイが附いていたので筆者は拡散状の天体の等濃度図を自動的に描かせて、偏光度を 4 枚のプレートの重ねあわせから求めるプログラムを開発した。

アルバム頁の左の写真はグラフィック・ディスプレイに表示されたウェスト彗星の核の部分の等濃度図である。又下の図は 4 枚のプレートから求められた偏光度の分布である。コホーテク彗星の時に富田氏達は 100 点余りの偏光度を求めるのに数日の計算が必要であったが、ここでは 100 万点の偏光度を求めるのに数十分の計算時間であった。(磯部琇三)